

「FD シンポジウム」

教職実践演習

教職実践演習から見る授業改善の方策・計画

教育学部 英語教育講座 立松大祐

1. はじめに

「教職実践演習」は、学生が身に付けた教員としての資質や能力を、大学の養成する教員像や到達目標に照らして確認する必修の科目であり、4年次の後学期に開講される。つまり、教員免許状を取得するに当たり、最後のチェックポイントとなる科目である。今年度、本科目の後半部分の授業を担当したこととFDシンポジウムの内容を踏まえ、授業改善の方策と計画を考えたい。

2. 教職実践演習の履修条件と愛媛大学教職課程のディプロマポリシー (DP)

学生が教職実践演習を受講するためには、「教職課程学習ポートフォリオ」の作成、「リフレクション・デイ」への3回の参加、履修時点での教職に関する科目の未履修が3科目以内、履修時点で、取得を目指す免許状の必要要件である教科の指導法又は保育内容の指導法の半数以上を修得済みである必要がある。教職課程学習ポートフォリオは、「ラーニング・ログ」(学習記録)、「プラクティス・ログ」(実践体験記録)、「リフレクション・ログ」(省察記録)で構成されており、それまでに身に付けた資質や能力を示す証拠となるものである。リフレクション・デイは、2年次末、3年次末、4年次前期末に設けられ、理論と実践を結びつけた体系的学習を支援することを目的とし、ラーニング・ログとプラクティス・ログからリフレクション・ログを作成するものである。

これらの記録は、大学として養成する教員像つまり到達目標への達成度を把握するために活用されるものである。愛媛大学教職課程のディプロマポリシー (DP) は次の5つである。

- ①教科・教職に関する幅広い基礎知識と、得意分野の専門的知識を有している。
- ②学校現場で生じている問題を始めとして地域や社会全体に関わる課題について、適切な対応を考え議論することができる。
- ③幼児・児童・生徒の発達に応じた保育・授業の構成や教材・教具の工夫ができる。

④実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる。

⑤教育的愛情を持って幼児・児童・生徒に接することができるとともに、多世代にわたる対人関係を身に付け、社会の一員として適切な行動ができる。

要約すると、DP①は教科・教職に関する知識、DP②は現代的・社会的課題に対する関心と問題解決力、DP③は授業力、DP④は実践と理論の往還による学びと省察力、DP⑤は対人関係力である。

3. 教職実践演習後半 (第10回～第14回)の内容

第10回目の授業では、英語教員に必要とされる資質・能力を自己診断するためのアンケート調査を実施した。次に、教育実習で自分が行った授業及び実習を通して学んだことを、4人グループ内で発表し、質疑応答と議論を行った。その後、教育実践を通して学んだことを、教科指導に関して3点程度に絞りレポートし、さらに、明らかになった課題とそれに対する取組を考える活動を行った。最後に、次回からの模擬授業についてのガイダンスを実施した。DPは①③④に対応しており、レポートによる評価を行った。

第11回から第14回は、3人1組での30分程度の模擬授業を毎回2組が実施した。授業者には事前に学習指導案とワークシートなどの補助資料を協力して作成し、授業の練習を行うことを課した。授業前には当該授業の背景説明を行い、授業後には自評を述べる形にした。授業者以外の受講者は、生徒役として模擬授業に参加し、その授業についてのレポートを次週までに作成することを求めた。教職実践演習における模擬授業では、授業者に授業実践力が身に付いているかを判断することが目的であり、授業実践力の向上を目指すものではない。

DPは①③④⑤に対応しており、学習指導案、観察、振り返りレポートにより評価を行った。

4. 授業改善の方策・計画

教職実践演習は教員免許状取得に当たっての出口チェックの役割を担い、学生は授業実践力が身に付いたかどうかを判断される。そのように整理すると、4年次前期までの教職課程の授業科目の重さが改めて実感できる。それぞれの授業で DP という到達目標の達成を意識して、学生を育ててきたのかということが問われるのである。最終の到達目標から各授業の目標を設定する逆向き設計で授業内容をデザインすることが必要であると考えられる。また、評価についてもどのような評価材料と方法でもって DP の達成に近づくことができるのかを問い直すことにより、評価の妥当性を向上させることができるであろう。

教職実践演習の第 11 回から第 14 回は模擬授業を実施しているが、授業実践力の向上を目的の一つとしないのは、もったいなく感じるところである。学生が教員免許を取得して社会に出るならば、最後まで授業実践力の向上を目指したい。しかしながら、授業内では 2 組の授業者が模擬授業を行うので、生徒役の学生が批評を述べたり、担当教員がアドバイスを述べたりする余裕はない。

そこで、Moodle などの ICT を活用し、授業外での支援が考えられる。例えば、録画した授業ビデオと生徒役の学生が作成したレポートを Moodle からアクセスできるようにし、授業者とのディスカッションを行うようにすると、学生同士のコミュニケーションから自信の模擬授業や教育技術についての振り返りが促されるであろう。また、教員もディスカッションに参加してコメントやアドバイスをすることも可能である。授業外学習になるが、DP④⑤を意識して学生に参加を促すことは可能であると思われる。

5. おわりに

教職実践演習の一部を担当し、FD シンポジウムに参加することにより、愛媛大学教職課程 DP への理解を深めることができた。学生に自信を持って本演習に向かわせるため、それまでの授業では DP と逆向き設計による授業デザインを意識し、学生に確かな能力や資質が身に付くよう教員養成に邁進したい。